

令和元年6月3日現在

機関番号：64302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02196

研究課題名(和文) 差別から見た日本宗教史再考 社寺と王権に見られる聖と賤の論理

研究課題名(英文) Reconsideration of the History of Japanese Religions from the Perspective of Discrimination: the Concepts of the Sacred and the Impure in the Court, and in the Temples and Shrines

研究代表者

磯前 順一 (Isomae, Jun'ichi)

国際日本文化研究センター・研究部・教授

研究者番号：60232378

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：これまで日本宗教史においては、おもに自由と差別とは対立するものとして描かれてきた。一方、「聖なるもの」に関する宗教研究の議論を再検討した結果、「聖(sacred)」が「俗(profane)」と「世俗(secular)」との関係性でそれぞれ異なる意味を持つことがあきらかになった。これらから、自由と差別とはむしろ切り離すことのできない関係にあるのではないかという理論的枠組みが導かれた。その上で、京都の清水坂、奈良の奈良阪、大阪の旧渡辺村などのフィールドワークを交えつつ、日本の歴史研究や差別研究を批判的に再検討し、日本における聖なるものと公共空間の関係を具体的に考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「聖」と「俗」の関係性に、「聖」と「賤」との関係性を重ねあわせて考察することで、公共空間における自由と差別とが、たんに対立するものとしてではなく、むしろたがいに不可分な関係にあるという理論的枠組みが導かれた。これは、日本宗教史や宗教研究の分野にあらたな視座をもたらすとともに、現代社会におけるさまざまな差別や排除の構造を分析し、よりよい公共空間とはなにかを模索するにあたって、重要な論点を提供するものである。

研究成果の概要(英文)：In the history of Japanese religions freedom and discrimination have been considered as opposed concepts. In this project we have re-examined the discourse on 'sacred' in the religious study. We found that the meaning of 'sacred' depended on its relationship to 'profane' and to 'secular'. This connective framework had led to idea that the concepts of freedom and discrimination are not opposed therefore cannot be separated from each other. Furthermore, the fieldwork on Kiyomizu-zaka (Kyoto), Nara-zaka (Nara) and Old Watanabe-mura (Osaka) was held, the study of Japanese history and study of discrimination were critically re-examined, and the relationship between sacred and public space in Japan was investigated.

研究分野：宗教学、批判理論

キーワード：聖なるもの 公共性 聖俗論 聖賤論 日本宗教史 被差別部落 世俗化論 主体化論

## 1. 研究開始当初の背景

宗教学における聖俗論はエミール・デュルケムに始まり、1950-60年代のミルチャ・エリアーデの議論でひとつの頂点をなした。その議論によれば、宗教的な聖なる空間や時間は、世俗化した俗なる空間や時間と対をなすものであり、その反復過程を通して聖と俗が交互に入れ替わるといった見解であった。聖俗論は1960-70年代に盛行した世俗化論に流れ込み、宗教は世俗化によって衰退するという見解とともに、世俗化した空間にも宗教の聖なる特質は姿を変えて保持されるという見解をもたらした。後者の代表がトーマス・ルックマン『見えない宗教』(1967年)であり、日本を含めた世界の宗教学に大きな影響を与えた。日本では、島園進をはじめとする宗教社会学研究会の一連の研究が大きく注目を浴びた。

一連の議論を1990年代以降に、新たに展開して見せたのがホセ・カサノバの「公共宗教」論やタラル・アサドの「宗教概念」論であった。特にアサドの議論では、聖なるものの理解を含めて「宗教」概念がプロテスタンティズムの二分法的理解(世俗的な政治領域が公共空間、宗教的な領域が私的空間)の延長線上にあり、同じキリスト教でもカトリックや、イスラームを始めとする他の宗教伝統ではそうした二分法が成り立たないことが指摘された。日本では研究代表者が、近代日本の宗教言説の布置をめぐって、仏教や民衆宗教がプロテスタント的な宗教概念に基づいて私的領域に割り当てられる一方で、国家神道は政治的な世俗領域として公共空間に割り当てられることで国民に天皇崇拝を義務化したことが可能になったと指摘した。続いて2010年代には公共宗教論の議論が日本でも盛んになり、非プロテスタント的な理解に立てば宗教もまた公共空間を支える原理になりえること、そして公共性が聖なるものの特質との関係でどのように現出可能になるのか、公共空間のメカニズムが宗教との関係から論じられるようになった。それは日本の公共空間を支える権威であった天皇制を聖賤論の観点から問い直す野心的な作業ともなる。

こうした公共宗教論をめぐる議論に大きな刺激を与えたのが、ジョルジョ・アガンベンの聖賤論である。アガンベンは、デュルケムらの聖概念を世俗概念ではなく、被差別民としての賤民論と結び付けなおすことで、近代の国民国家をはじめとする公共空間が成り立つためには、差別化された賤民の存在が不可欠とされてきたことを、ナチスのホロコーストで虐殺されたユダヤ人の例から解き明かした。そして、賤視された人々は同時に聖化された人々でもあり、法の外側に措定される賤民は聖化された王や宗教者と表裏一体の存在であることを論じた。ハンナ・アレントの公共性論を差別と排除の側面から読み直したアガンベンの議論は、アレントの見解を平等性の視点から論じたハーバマスの議論と相対立しながらも相補うかたちで、今日の公共宗教論の最前線の議論を形作っている。しかも、穢れをめぐるメアリー・ダグラスの人類学の議論やハレとケをめぐる民俗学の議論との接合へと、その聖賤論をさらに学際的に展開する可能性を含んでいる。しかし、アガンベンやハーバマスの議論は、公共宗教論を鋭く論じたものでありながらも、日本のみならず世界の宗教学の分野においてはほとんど言及されないまま、従来の聖俗論の成果から切り離されたままにあった。

## 2. 研究の目的

本研究は差別や排除という現象を、宗教的な聖なる空間と表裏一体をなすものとして理解する。そのことで、従来の聖なる空間を差別や排除と切り離して論じる宗教学や社寺論の立場を克服することを目的とする。それは聖なるものの名前の下に成り立つ公共空間を、他者の排除や差別の働きを不可避とするものとして捉えることで、差別や排除を極力含まない他者との共存がどのようにして可能になるのかを模索する公共宗教論の新たな試みとなる。

## 3. 研究の方法

本研究においては、日本宗教史の資料研究を踏まえることで、理論的に分立する諸分野の研究成果の接合を試みる。まずは、デュルケムからエリアーデ、さらにはアサドからアガンベンまでの宗教学および思想研究の、宗教と公共性をめぐる理論的成果を体系的に把握し、理論的な全体布置を把握する。エリアーデについては奥山倫明『エリアーデ宗教学の展開』(2000年)および Russell T. McCutcheon, *Manufacturing Religion*(1997)、さらに Nicolae Babuts, *Mircea Eliade*(2014)まで、様々な立場からの再評価が試みられている。デュルケムについては増沢知子『夢の時を求めて』(1993年)、山崎亮『デュルケム宗教学思想の研究』(2001年)、藤原聖子『「聖」概念と近代』(2005年)などの意欲的な研究がある。アガンベンについてはいまだ評価は定まらないが、金森修『<生政治>の哲学』(2010年)、Matthew Calarco & Steven DeCaroli, *Giorgio Agamben*(2007)などを参照にしながら、ハンナ・アレントの公共性論との関係性を吟味する。同様にハーバマスの宗教論もいまだ十分な評価は定まっていないが、Craig Calhoun & Eduardo Mendietta, *Habermas and Religion*(2013)やハーバマス他『公共圏の挑戦』(2011年)でのチャールズ・テイラーやジュディス・バトラーとの論争を手がかりとして、宗教と公共性の関係、さらにはアレントの公共性論との関係を把握する。

次に、社寺論および被差別部落論を日本宗教史の歴史叙述として読み解く。具体的には、網野善彦『中世の非人と遊女』(1994年)に収録された聖なるものと差別に関する諸論文を軸として、社寺と賤民をめぐる日本宗教史の文献一覧、及びその論争点の把握をおこなう。その際に当該分野の最新の研究のひとつである片岡耕平『日本中世の穢と秩序意識』(2014年)を導き糸として、網野の論争相手であった大山喬平や黒田俊雄、横井清、脇田晴子、細川涼一、服部

幸雄らの代表的研究をとりあげ、日本の社寺と賤民をめぐる研究として、網野との関係を参照点として研究史をまとめる。そのなかで網野以前の研究として、喜田貞吉や折口信夫の議論、さらに網野の宗教学理解を支えたとされる中沢新一の聖賤論も射程において、研究史の中に位置づける。この作業の最大の目的は、1980-90年代に盛行した社会史の研究の影響を受けた日本中世の聖賤論の遺産を批判的に読み直すことで、その成果と課題を宗教学の観点から洗い直すことである。

さらに、神道学や仏教学の社寺論、民俗学の芸能論、歴史学の被差別部落論など、網野をはじめとする歴史学における社寺をめぐる聖賤論周辺の研究に関する基本文献リストを作成しつつ、その理論的布置の体系的な把握をおこなう。そのなかで、中世から近世、さらには近世から近代へと展開する聖なるものと差別の関係の歴史的位相の変化を明確に把握する。神道学や仏教学の社寺論は、個別の社寺論の研究蓄積の厚い分野であるが、自らの所属する社寺が被差別部落民とどのようにかかわって来たのかについては明確な記述がきわめて少ない。それをおぎなうために、大阪人権博物館の吉村智博氏(研究協力者)の協力を仰ぎつつ、歴史学をはじめとする被差別部落論の研究史から聖賤論に適した成果を抽出する。特に、近世の皮細工で知られる大阪旧渡辺村と坐摩神社の関係は、一次史料に基づく歴史記述の中心として重要な役割を果たす。それを、日本宗教史の再検討から分析された賤民と八坂神社や清水寺あるいは西大寺や興福寺との関係と比較する中で、社寺と賤民の関係がいかなるものであったのか、具体的な資料に基づいて検討する。

こうした一次文献の解読に加え、清水寺、奈良阪、旧渡辺村など現地のフィールド調査の蓄積によって、網野が提起した日本列島を東と西で区別する議論に批判的検討を加える。そのうえで、エリアーデからアガンベンにいたる聖俗論および聖賤論を日本の宗教史の独自の観点から読み直した理論化の作業を行う。その際、インドのカースト制度を念頭に、聖賤論を研究する研究者と連携して、日本とインドを比較したアジア諸地域における聖なるものと賤民の関係をめぐる比較宗教史に関する考察を行い、ヨーロッパの宗教伝統から出たエリアーデやアガンベンの議論を対象化し、日本独自の歴史的な文脈に基づく聖賤論の研究を展開する。

なお、三年間における研究協力者との共同作業は、国際日本文化研究センターにて研究代表者が主宰する研究会として、海外の大学所属の研究者を含めて、数カ月一度定期的にミーティングを行う。

#### 4. 研究成果

初年目には、網野善彦『中世の非人と遊女』(1994年)に収録された諸論文の批判的解読を徹底して行なった。そこにおいて自由という問題が聖とどのように関係しているのか、そして差別と排除という現象がどのように結び付けているのかを検討した。その際に日本宗教史の聖賤論の最新成果のひとつである片岡耕平『日本中世の穢と秩序意識』(2014年)との比較を、本人との直接的な討議も踏まえて行い、現在における歴史学の差別論の問題点を把握した。そこでは自由と差別の関係が相対立するものと理解されており、むしろ支えあうものとして理解する観点が弱いことが明らかになった。宗教研究の聖理論についてはデュルケムに始まり、1950-60年代のエリアーデにいたる聖俗論を軸に、アサドの宗教/世俗論およびアガンベンの聖賤論を比較して、聖の意味づけの異なりを把握した。「俗(profane)」と対をなすとき、「世俗(secular)」と対をなすときの、「聖(sacred)」の意味の違いが問題であることが明らかになった。そして、日本宗教史と欧米の聖理論の交差点に、公共空間のメカニズムが宗教との関係から論じられるよう視点をおくことで、日本の公共空間を支える権威であった天皇制を聖賤論及びジャック・ラカンの他者論の観点から問い直す作業に着手した。

二年目には、神道学や仏教学の社寺論、民俗学の芸能論、歴史学の被差別部落論など、網野をはじめとする歴史学における社寺をめぐる聖賤論周辺の研究に関する基本文献リストを作成しつつ、その理論的布置の体系的な把握をおこなった。そのなかで、すでに中世日本の芸能史を中心に研究を進めるチューリヒ大学のラジ・シュタイネック氏およびトモエ・シュタイネック氏(いずれも研究協力者)とも連絡を密にとり、中世から近世、さらに近世から近代へと展開する聖なるものと差別の関係の歴史的位相の変化を把握した。こうした作業が天皇と社寺、さらには天皇と芸能者や賤民たちの関係の再考を促すものになる以上、網野『異形の王権』(1986年)にはじまり、安丸良夫『近代天皇像の形成』(1992年)や石母田正『日本古代国家論』(1995年)、井上寛司『「神道」の虚像と実像』(2011年)など、天皇制や国家神道をめぐる従来の議論を聖賤論の観点から再解釈する試みと接合させていった。また、大阪人権博物館の吉村智博氏(研究協力者)の協力を仰ぎつつ、歴史学をはじめとする被差別部落論の研究史から聖賤論に適した成果として、京都の清水坂、奈良の奈良坂、そして大阪の旧渡辺村という研究対象を抽出していった。そのなかで、社寺と非人の関係がいかなるものであったのか、具体的な資料に基づいて検討をおこない、欧米の宗教学者のエリアーデの世俗化論では解釈できない、むしろイタリア系ユダヤ人のアガンベンの聖俗論に共通性を有する日本の聖なるものと賤民との関係の特質を明らかにした。

三年目は、一次史料にもとづく日本史学及び被差別部落史の聖俗論の研究の批判的再検討を集大成した。そして、宗教学の聖俗論及び政治理論の公共性論の理論的な系譜を、日本宗教史の資料にもとづいて読み直した。ここにおいて、ラジ・シュタイネック氏や酒井直樹氏(コーネル大学・思想史)、苅田真司氏(國學院大学・政治理論)、岩谷彩子氏(京都大学・文化人類学)、

鈴木岩弓氏(東北大学・民俗学)、上村静氏(尚絅学院大学・宗教学)、寺戸淳子氏(専修大学・宗教学)、川村寛文氏(関東学院大学・思想史)、久保田浩氏(明治学院大学・宗教学)、舟橋健太氏(龍谷大学・文化人類学)らとの協力関係において、欧米の宗教理論を日本宗教史の観点から書き直す先行研究の再評価を提示した。また、その先行研究の再評価を踏まえて、吉村智博氏や佐々田悠氏(宮内庁正倉院事務所・古代史)さらには吉田一彦氏(名古屋市立大学・日本宗教史)、舩田淳一氏(金城学院大学・中世史)、小倉慈司氏(国立歴史民俗博物館・古代史)、佐藤弘夫氏(東北大学・思想史)、山本昭宏氏(神戸外国語大学・近現代史)、青野正明氏(桃山学院大学・近代史)、西宮秀紀氏(古代史)、関口寛氏(四国大学・近現代史)、片岡耕平氏らとの研究連携によって、清水坂・奈良坂・旧渡辺村を軸にした聖俗論及び聖賤論の観点からの日本宗教史の考察を行った。

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 6件)

Naoko Wake, Homosexuality and Psychoanalysis Meet at a Mental Hospital: An Early Institutional History, in *Journal of the History of Medicine and Allied Sciences*, 74-1, 2019, pp.34-56

<https://doi.org/10.1093/jhmas/jry041>

Isomae Jun'ichi and Yijiang Zhong, Transcendence and the Process of Subjectification, and then Sustainability; On Prasenjit Duara's The Crisis of Global Modernity: Asian Traditions and A Sustainable Future, in *Religious Studies Review*, 44-2, 2018, pp.183-190  
<https://doi.org/10.1111/rsr.13421>

磯前順一、「宗教概念論」から「宗教主体化論」へ 島園進と安丸良夫の金光論を通して、*平和研究*、49、2018、pp.47-62

磯前順一・鍾以江、対話的超越性と主体化過程、そして持続可能性 プラセンジット・ドゥアラ『グローバル近代の危機: アジアの伝統と持続可能な未来』をめぐって、*アリーナ*、21、2018、pp. 351-363

磯前順一、津田左右吉の文献学と儒学的合理主義 人文学的批評の両義性、津田左右吉とアジアの人文学 研究報告論文集、4巻、2018、pp.3-20

磯前順一、津田左右吉の国民史構想 他民族帝国における単一民族国家論の役割、*アリーナ*、19、2016、pp. 258-292

[学会発表](計 9件)

上村静、第4エズラ書、日本聖書学研究所月例会、2018

上村静、クムランと死海文書:神殿時代末期のユダヤ社会の同時代史的視点から、日本ユダヤ学会、2018

上村静、古代ユダヤ教における学び 聖典制定とその教育、科学研究費研究助成金基盤研究 A(海外学術調査)「イスラエル国ガリラヤ地方の新出土シナゴーク資料に基づく一神教の宗教史再構築」シンポジウム、2018

青野正明、近代日本の宗教政策 国家神道と「類似宗教」、檀国大学校日本研究所 第7回海外碩学招請講演、2018

Jun'ichi Isomae, Religious Subjectification in Modern Japan: Translation, Transference and Mythical Others, Princeton University, East Asian Program, USA, 2018

Jun'ichi Isomae, Hear the Voices of the Dead?: Religious Experience and the Northeast Japan Disaster, The Portland State University, Center for Japanese Studies, USA, 2017

Jun'ichi Isomae, Listening to the Disquiet Voices from the Dead in Northeast Japan Colonialism, National Tsing Hua University, Taiwan, 2017

Jun'ichi Isoame, Constructing Religious Subjectivity after Northeast Japan Earthquake and Tsunami, Center for Asian Studies, Michigan State University, 2017

磯前順一、津田左右吉の文献学と儒学的合理主義 人文学的批評はいかにして可能になるか、国際シンポジウム 人文学の再建とテキストの読み方 津田左右吉をめぐって、早稲田大学総合人文科学研究センター、2017

[図書](計 8件)

磯前順一・磯前礼子編、原秀三郎述、三元社、石母田正と戦後マルクス主義史学 アジア的生産様式論争を中心に、2019、271p

シュテフィ・リヒター他編、新曜社、世界のなかのポスト3.11 ヨーロッパと日本の対話、2019、338p

藤間正大著、磯前順一・山本昭宏編、ペリかん社、希望の歴史学 藤間生大著作論集、2018、366p

青野正明、法蔵館、植民地朝鮮の民族宗教 国家神道体制下の「類似宗教」論、2018、310p

鈴木岩弓・磯前順一・佐藤弘夫編、ペリかん社、<死者/生者>論 傾聴・鎮魂・翻訳、2018、384p

鄭毅・磯前順一・全成坤、ハッコバン(ソウル)、日本脱国家論(韓国語)、2018、363p

Michael Wachutka, Monika Schimpf, Jun'ichi Isomae and et.al., Iudiciu (Muncheu), Religion, Politik und Ideologie: Beitrage zu einer kritischen Kulturwissenschaft (執筆部分は英語), 2017, 405p

白石太一郎、鈴木靖民、寺澤薫、仁藤敦史、武末純一、森下章司、磯前順一、水野敏典、KADOKAWA、纏向発見と邪馬台国の全貌、2016、348p

〔産業財産権〕

〔その他〕

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。